

「人間と医療」発刊にあたって

－ 疼痛とモルヒネ体験 －

Relief from Pain Crisis Using Morphine

日本医学哲学・倫理学会 九州支部長 藤野 昭宏

昨年の平成22年6月の日本医学哲学倫理学会理事会にて、正式に九州支部の設立が承認され、同年7月17日に九州支部主催による第1回九州医学哲学倫理学会学術大会が福岡歯科大学で開催された。本学術誌「人間と医療」は、その大会で発表された内容を論文として掲載するために発刊されたものである。

実は数年前から理事会の場にて九州支部の開設を強く要望されていたが、まだその時期に達していないとの思いがあり、しばらく様子を見ていたというのが正直な気持ちであった。ところが、一昨年の学会総会で熊本大学の高橋隆雄先生が学会賞を受賞される機会に恵まれ、これを契機にして九州支部創設の機運が一気に高まり、九州支部設立準備委員会を立ち上げて、昨年の学術大会と九州支部総会を開催することができた。

その大会当日の総会で私は九州支部長として挨拶する予定であったが、大会前日になって足膝関節部の激痛が発症し、所属の大学病院に緊急入院するという本人も全く予想だにできなかった出来事が起きてしまった。10年ぶりに左大腿骨下端部の骨巨細胞腫が再発し、これまでに経験したことがない痛み、いわゆる「疼痛」を体験することとなった。

この招かざる膝関節の痛みというのが今まで経験したことのないあまりにもひどい疼痛（骨の内側からハンマーで激しく叩かれているような痛み）であり、一睡もできずに呼吸さえ苦しい状況となったこ

とから、これは尋常ではないと判断して翌日に何とか仕事のメドをつけて同僚の麻酔科教授に相談したところ、その1時間後にそのまま入院することとなり、直ちに手術室で硬膜外局所麻酔をしてもらった。これによって痛みがかなり改善したものの、数時間後には再び激しい疼痛が発症したため、主治医の判断でモルヒネを1ショット追加したところ、疼痛が劇的に消失するという体験をした。

この骨巨細胞腫というのは基本的には良性であるが、手術で取り切れずに再発することで有名な腫瘍である。まさかこの腫瘍で末期がんの患者さんに使用される麻薬のモルヒネが自分に投与されることになるとは夢にも思っていなかったが、痛みの劇的な改善は実に見事なものであった。しかし、副作用の尿閉がひどく、導尿カテーテルを繰り返し挿入されたのには参ってしまった。その年卒業したばかりの新人ナースの練習台に喜んで(?)なったものの、これがまた何とも複雑な気持ちであった。

その後モルヒネから合成麻薬のフェンタニールに変更して痛みが治まったため、5日間で麻酔科は退院した。その約10日後に別の病院の整形外科で、10年ぶりとはいえ5度目の腫瘍掻爬術と骨セメント補填手術を受けた。この手術は14～12年前にも4回にわたって大学病院で受けており、今回は非常に厳しい内容の手術であった。幸いにも極めて数少ない骨腫瘍のベテランのY先生に出会うことができ、本当にぎりぎりのところで自分の膝関節を残したまま

無事に手術は成功の内に終了することができた。今から考えると、大会前日に突然10年ぶりに再発して、緊急入院して疼痛コントロールした後に、直ちに別の病院で非常に困難な5度目の手術を終えることができたという一連の流れは、まさに奇跡に近いものであったように思えてならない。

私は日頃、医学生たちに慢性的な疾患(disease)を抱えている患者さんにとって、疾患だけではなく病い(illness)への対応の重要性についてよく説いているが、今回私が体験したことは、極めて激しい痛みが生じている急性期の真只中にある場合の患者の心理というのは、精神的痛みや社会的な痛み、あるいは霊的痛み(スピリチュアルペイン)などを感じている状況ではなく、とにかくこの激しい身体的痛みを一刻も早く何とか取ってほしいという必死の気持ちであったということである。

がん末期の患者さんにとって、私が体験した激しい痛み以上の疼痛が数ヶ月単位で続くことが少なくないことを思うと、身体的な疼痛のコントロールを確実にできる高い臨床能力をもった麻酔科医の存在とメンタルケアができる精神科医や看護師の双方の協力があって初めて成り立つのがホスピスケアではないかと思いつく感じた次第である。

この体験以来、学生たちに「痛みのコントロールこそが医の原点であり、現在不足している麻酔科医

として疼痛をコントロールできる専門家になって、その上で患者さんの病いを理解してほしい」と訴えている。

ということで、九州支部創設に奔走した本人がどうして大会当日出席できなかったかについて大変恐縮ながら長々と説明させていただいたが、運営委員の皆様方のご尽力により、第1回九州医学哲学倫理学会学術大会は無事に終了することができた。ここに改めて心より御礼申し上げたい。

現時点では九州支部に所属する会員がまだ少なく、学術大会での発表者が多くない状況にあるため、編集委員長の私から九州支部運営委員の先生方に執筆をお願いして、どうか学会誌としての内容を確保することができたのではないかと思う。もちろん依頼論文とはいえ、規約に則って編集委員会が指名した2名による査読を行ったことを記しておきたい。

日本医学哲学倫理学会九州支部は昨年誕生したばかりのまだまだ乳児の段階にある。これから乳児から幼児を経て、学童期と思春期を過ぎて青年期に入る頃まで、どうか会員の皆様方の積極的なご参加と暖かいご支援を願ってやまない。

(ふじの あきひろ 産業医科大学)